

成年後見人を務める
雨竜の司法書士

きむら こういち
木村 幸一さん(34)

続発する被害

認知症や障害のため判断能力がない、または不十分な人に代わり、財産管理や施設の入退所手続きなどを行う成年後見人。雨竜町に事務所を構え現在、12人もの後見人を務める。道北の司法書士の中でもトップク

ラスだ。

4年前、施設に入所する認知症の女性の家族から「遠方に住んでいて頻繁には来れない」と相談を受けた人もいた。「お金がない」が口癖になっていった。初。「悪質商法の被害に遭った人や、親族に財産を使

年金でやっと生活しているのに、必要性が疑わしい住宅リフォーム工事で180万円のローンを組まされた人もいた。「お金がない」が口癖になっていった。

もっと前に後見制度を利用していけば、こんなことにはならなかったのでは」後見人には契約を無効にする取消権が与えられてい

番のやりがいにつながるという。

京都生まれ。関西大(大阪)を卒業後に司法書士となり、京都市内で数年間、開業。札幌の司法書士から「弁護士、司法書士が北海道に少ない。来ないか」と誘われ2005年4月、司法書士がいなかった雨竜町に事務所を開いた。「北海

依頼者の笑顔励みに

会福祉協議会の養成講座で講師を務める。他人の財産を扱うボランティアだけに、一般の人は二の足を踏むことが多い。「基本は、自分がされてうれしいことをして、困ることをしないこと」と、健全な常識を働かせる大切さを説く。「市民後見人に望まれるのは被後見人とのコミュニケーション。特に定年後の人は人生経験も豊か。みなさんに制度を知ってほしい」と訴える。

(吉田隆久)



「成年後見は『本人の利益のため』が基本」と話す木村さん

る。「後見人がいると知ると悪質業者も引き下がると聞く。守る手だてとして有効だ」と強調する。長男に財産を使い込まれそうになった認知症の女性の後見人を務めた時は、長男との話し合いが難航し、精神的に追い込まれた。それでも女性が亡くなった時、ほかの子供に「母を無事に見送ることができた」と感謝された。「本人が健

市民参加探る

高齢化が進み、成年後見人が必要とする人は増すと予想される。だが「地方ほど受け皿が少ない。うちも将来、限界が来る」と現状を説明する。そこで注目を集めるのが、専門家でもなく家族でもない第三者による「市民後見」だ。今月14日には、深川市社

ひと空知